

Case.26

一 関 商 工 会 議 所

「もち食文化」を活かした観光・農業活性化の検討

一関商工会議所の概要

一関商工会議所（会員数約2,600事業所）は、一関市の商工業の振興と地域社会の発展のために様々な事業を展開しており、農商工連携や農林漁業の6次産業化、地域資源を活用した商品開発・ブランド化等に積極的に取り組んでいる。

また、一関市は三県にまたがる栗駒山、厳美渓および一関温泉郷等の観光地を有し、世界遺産を有する平泉町と隣接していることから、インバウンドを含む観光の振興にも力を入れている。

2010年、一関・平泉地域に約400年前から伝わるとされる「もち食文化」を核とした地域連携組織「一関もち食推進会議」が設立された。この会議には、一関市および平泉町の農業・商工・観光団体、観光関連事業者、民間団体、行政等の多様な関係者が参加しており、この中でも一関商工会議所は中心的な役割を果たしている。

一関もち食推進会議は、もち食文化に関する様々な取組を実施している。全国各地からもちを使った様々なメニューが集結する「全国ご当地もちサミット」は、2016年で第5回を迎え、人気のイベントとなっている。また、もち食文化に関する講義、実習、試験を行う「もちマイスター検定」の実施等、その普及や伝承にも注力している。近年では、2013年にユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」の例示として「一関・平泉地域のもち食文化」が取り上げられるなど、注目を浴びている。こうした背景のもと、一関・平泉地域では、もち食文化を魅力ある地域資源として対外的に発信し、観光や農業の活性化へとつなげることへの期待が高まっており、一関商工会議所の果たすべき役割は一層大きいものとなっている。

■ 岩手県における位置



■ 主要データ（一関市）

人 口	121,583 人（平成27年国勢調査）
面 積	1,256.42km ² （平成27年全国都道府県市区町村別面積調）
事業所数	5,821 事業所（平成26年経済センサス－基礎調査）
従業者数	52,244 人（平成26年経済センサス－基礎調査）
第1次産業	830 人（平成26年経済センサス－基礎調査）
第2次産業	16,254 人（平成26年経済センサス－基礎調査）
第3次産業	35,160 人（平成26年経済センサス－基礎調査）
耕地面積	18,300ha（平成27年農林水産関係市町村別統計）
観光入込客数	2,194 千人（平成27年版岩手県観光統計概要）

「もち食文化」を活かした観光・農業活性化の検討

利活用事例の全体像 施策立案型

活用の背景

一関商工会議所等により構成される地域連携組織「一関もち食推進会議」では、一関・平泉地域に古くから根付く「もち食文化」を活かした観光と農業の振興策を以前から検討していた。「食と農の景勝地^{*1}」の認定申請へ向けた計画策定や、今後の施策検討にあたり、現状分析を行った。

分析 1 一関市と平泉町の滞在人口
(まちづくりマップ-滞在人口率)

分析 3 一関市の農業の現状
(産業構造マップ-農産物販売金額、農業者分析)

分析 2 観光の目的地
(観光マップ-目的地分析)

分析 4 一関市の経営体当たりの農産物販売金額
(産業構造マップ-農産物販売金額)

課題の見える化

- 世界遺産登録を背景とした平泉町への大きな観光需要を、一関市は十分に取り込めていない。
- 一関市は東北地方の中でも有数の農業が盛んな地域だが、経営体当たりの販売金額は高いとはいえない。

以上より、「食と農の景勝地」申請の計画策定や今後の施策検討では、これらの課題の解決を目指すこととした。

分析 5 一関市と平泉町の人の流れ
(まちづくりマップ-From-to分析 (滞在人口))

分析 6 一関市の農業生産関連事業の実施状況
(産業構造マップ-農業者分析)

分析 7 もち食文化に関する住民・事業者の意識 (独自分析)

得られた示唆と課題解決のための施策案

- 平泉町への観光において一関市が交通や宿泊の拠点になっていると推察される。
- 一関市の農業生産関連事業の実施状況は「海外への輸出」や「農家民宿」が低調となっている。
- 地元の人たちはもち食文化を魅力的な地域資源だと考えているが、もちを食べる頻度は減り、外食でもちを食べる機会も少ない。

一関商工会議所が行った以上の分析結果を踏まえて、一関もち食推進会議では次の施策を取りまとめた。また、これらをベースに計画を策定し、「食と農の景勝地」の認定地域に選出された。

- 平泉町の観光地と一関市の農家民宿やもち料理・もち食文化体験を組み合わせた周遊ルートの設定を行う。
- 農産物の海外輸出へ向けた市場調査を実施する。
- 市内飲食店におけるもち食メニューの充実や小中学校における「もち本膳出前授業」を推進する。

1: 農林水産省事業。地域の食と、それを生み出す農林水産業を核として訪日外国人を中心とした観光客の誘致を図る地域での取組を認定する仕組み。観光需要を国産農林水産物・食品の需要拡大および農山漁村の所得の向上につなげていくことを目的としている。

活用の背景

一関・平泉地域では、少子高齢化と人口減少等による地域の活力低下等が懸念される状況にある。平泉町は2011年に世界遺産登録された文化遺産を有するなど魅力的な観光地であるが、隣接する一関市ではその好影響を十分に取り込めず、国内外における観光客の受入れ促進が課題と認識されていた。

そのような中、一関商工会議所等により構成されている「一関もち食推進会議」では、一関・平泉地域の基幹産業である農業を背景とした「もち食文化」を中心に、観光と農業の活性化や食文化・伝統の継承に向け、一体となった取組が進められている。

そこで、これらの取組を一層強化し、観光と農業の活性化を促進するため、農林水産省の事業である「食と農の景勝地」の認定申請に向けた計画書作成や、今後の施策の立案を行うこととなり、一関・平泉地域の観光と農業を取り巻く現状を分析した。

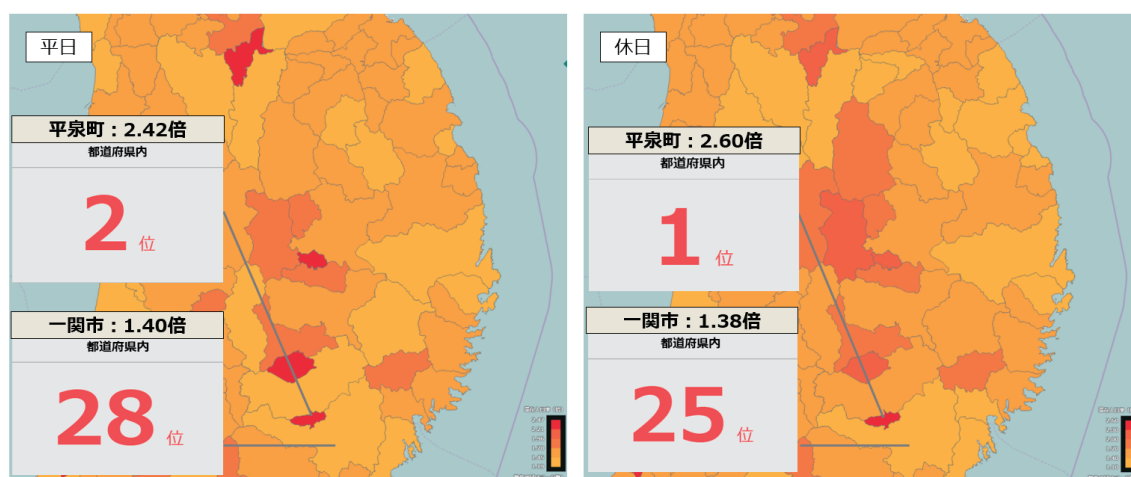
分析① 一関市と平泉町の滞在人口（まちづくりマップ）

一関・平泉地域の観光を取り巻く現状を把握するため、滞在人口を分析した。

図1は、一関市と平泉町の滞在人口率を示したものである。これを見ると、平泉町の滞在人口率の県内順位は平日2位、休日1位とともに県内トップ水準となっている一方で、一関市は平日28位、休日25位といずれも低水準となっていることが分かる。また、平泉町の月別推移をみると、5月から7月にかけて平日より休日の方が多くなっていることが分かる。これは、GWや夏休み等の観光客増加の影響と推察される。さらに、時間別推移では、平泉町は平日・休日とも日中に増加しているのに対し、一関市は減少しており、域外への流出傾向がみられる。

以上より、平泉町には多くの観光客が訪れていることがみて取れるが、一関市にはその傾向はみられず、平泉町の観光需要の好影響を十分に取り込めていないことが分かった。

（図1）まちづくりマップ 滞在人口率 [2014年]



● まちづくりマップ>滞在人口率>「表示する内容を指定する」で平日または休日を選択>グラフを表示
(注) 2017年2月におけるRESAS第2次リリース前のマップであり、現時点の内容とは一致しない。



● まちづくりマップ>滞在人口率>「表示する内容を指定する」で平日または休日を選択>グラフを表示
(注) 2017年2月におけるRESAS第2次リリース前のマップであり、現時点の内容とは一致しない。

Point!

一関市は、平泉町への観光需要の好影響を十分に取り込めていない

分析② 観光の目的地（観光マップ）

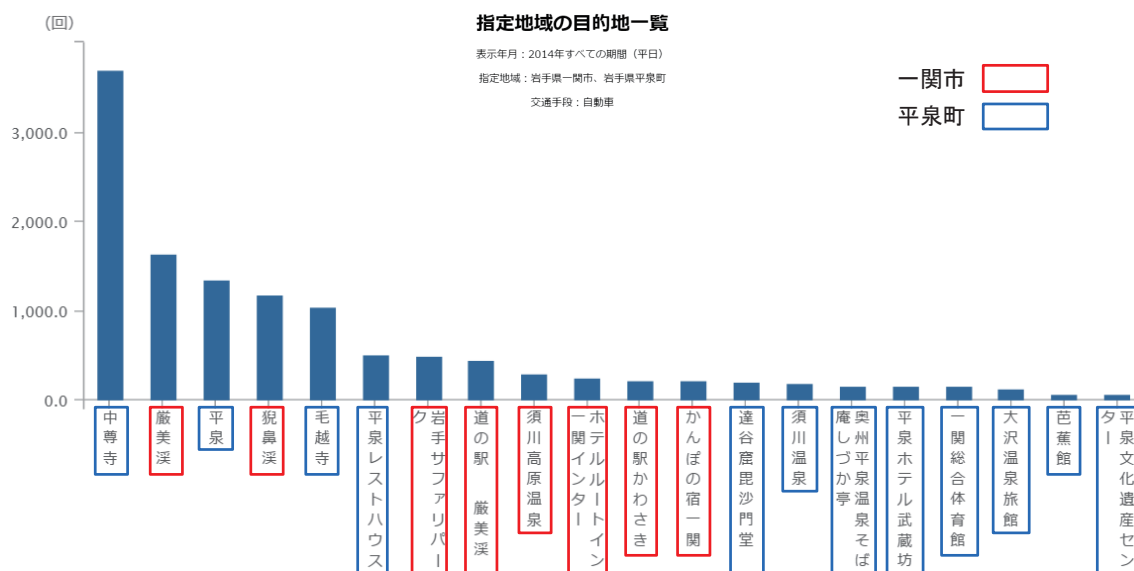
次に、一関・平泉地域の来訪者がどのスポットを訪れているかを考察するため、目的地検索の結果を分析した。

図2は、一関市と平泉町における主要スポットの目的地検索回数を示したものである。これを見ると、中尊寺、厳美渓、狛鼻渓といった観光地が上位となっているが、中でも平泉町にある中尊寺の検索回数が突出して多くっており、一関市にある厳美渓や狛鼻渓の検索回数はその半数以下となっていることが分かる。

以上より、一関・平泉地域を訪れる人の多くが、平泉町の中尊寺を訪れていると考えられる。

（図2）観光マップ 目的地分析（平日、自動車）[2014年]

合算自治体：岩手県一関市、岩手県平泉町



●観光マップ＞目的地分析＞「平日・休日を指定する」で「平日」を選択＞目的地検索ランキングを表示＞「合算地域を追加する」で合算対象自治体を追加

Point!

一関・平泉地域の来訪者の多くが平泉町の中尊寺を訪れていると考えられる

分析③ 一関市の農業の現状（産業構造マップ）

農業についても現状を把握するため、一関市の農産物販売金額と農業者の農作業日数を分析した。

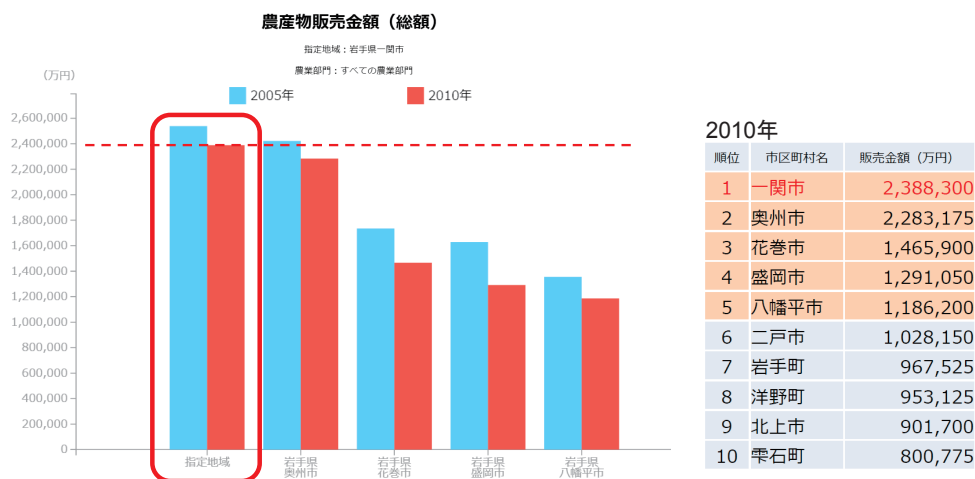
図3は、一関市の農産物販売金額を県内市町村と比較したものである。これを見ると、一関市は県内市町村の中で最も高いことが分かる。

また、図4は一関市の農産物販売金額を、図5は一関市の年間延べ農作業日数を、それぞれ東北地方の市町村と比較したものである。これを見ると、一関市はいずれも2番目に高くなっており、東北地方の中でも上位であることが分かる。

以上より、一関市は県内のみならず東北地方でも有数の農業が盛んな地域であることが分かった。

（図3）産業構造マップ 農産物販売金額（岩手県内）[2005年、2010年]

比較自治体：岩手県一関市、岩手県奥州市、岩手県花巻市、岩手県盛岡市、岩手県八幡平市



●産業構造マップ>農産物販売金額>「表示レベルを指定する」で「市区町村単位で表示する」を選択>グラフを表示>「比較地域を追加する」で比較対象自治体を追加

●産業構造マップ>農産物販売金額>グラフを表示>データをダウンロード により得たデータを基に一関商工会議所作成

（図4）産業構造マップ 農産物販売金額（東北地方）[2010年]

順位	県	市町村	販売金額（万円）
1	宮城県	登米市	2,831,625
2	岩手県	一関市	2,388,300
3	青森県	弘前市	2,371,450
4	秋田県	横手市	2,358,050
5	岩手県	奥州市	2,283,175
6	山形県	鶴岡市	2,165,500
7	宮城県	大崎市	2,074,700
8	青森県	十和田市	1,991,675
9	宮城県	栗原市	1,915,725
10	秋田県	大仙市	1,836,450

●産業構造マップ>農産物販売金額>グラフを表示>データをダウンロード により得たデータを基に一関商工会議所作成

（図5）産業構造マップ 農業者分析（東北地方）[2010年]

順位	県	市町村	農作業日数（人日）
1	青森県	弘前市	4,078,964
2	岩手県	一関市	3,192,976
3	岩手県	奥州市	3,174,339
4	秋田県	横手市	2,275,685
5	宮城県	登米市	2,254,102
6	宮城県	栗原市	2,153,584
7	福島県	福島市	2,047,845
8	福島県	郡山市	1,959,092
9	岩手県	花巻市	1,949,954
10	宮城県	大崎市	1,936,308

●産業構造マップ>農業者分析>年間延べ農作業日数>データをダウンロード により得たデータを基に一関商工会議所作成

Point!

一関市は東北地方でも有数の農業が盛んな地域である

分析④ 一関市の経営体当たりの農産物販売金額（産業構造マップ）

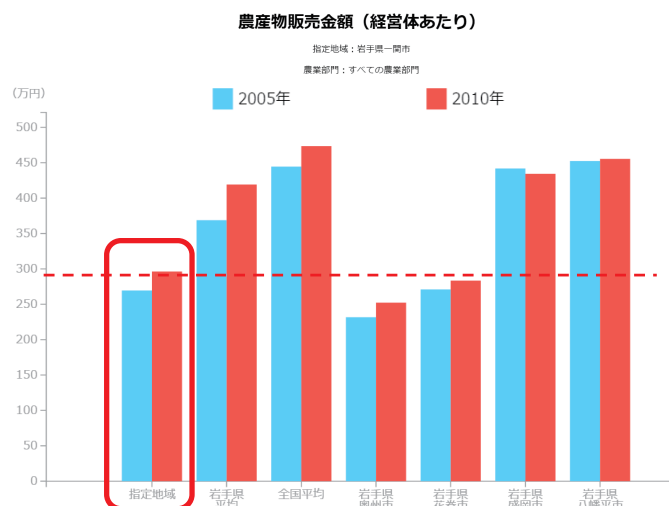
一関市全体として農業が盛んであることは確認できたが、経営体単位でみた現状についても把握するため、経営体当たりの農産物販売金額について分析した。

図6は経営体当たりの農産物販売金額を、図7は農産物販売金額帯別の経営体の割合を、それぞれ分析③で把握した県内の販売金額上位5市間で比較したものである。これを見ると、一関市の経営体当たりの販売金額は盛岡市や八幡平市を下回っており、農産物販売金額帯別の経営体の割合でも、一関市は「100万円未満」の割合が5市の中で最も大きいことが分かる。

以上より、一関市の経営体当たりの農産物販売金額は他市町村と比較して高いとはいえないことが分かった。

（図6）産業構造マップ 農産物販売金額
（経営体当たり）[2005年、2010年]

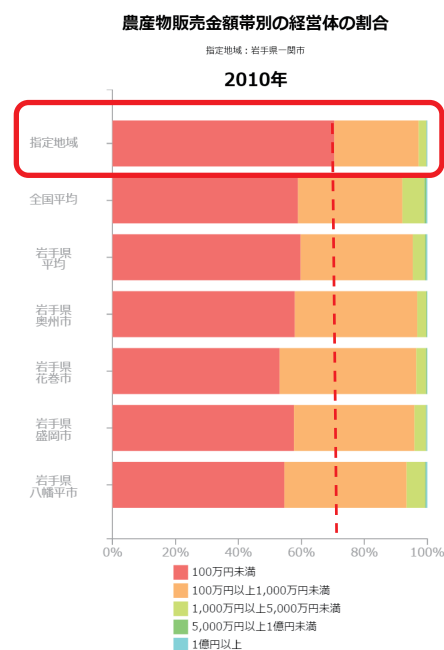
比較自治体：岩手県一関市、岩手県奥州市、岩手県花巻市、
岩手県盛岡市、岩手県八幡平市



●産業構造マップ＞農産物販売金額＞「表示レベルを指定する」で「市区町村単位で表示する」を選択＞グラフを表示＞「比較地域を追加する」で比較対象自治体を追加

（図7）産業構造マップ 農産物販売金額
（農産物販売金額帯別の経営体の割合）
[2010年]

比較自治体：岩手県一関市、岩手県奥州市、
岩手県花巻市、岩手県盛岡市、岩手県八幡平市



●産業構造マップ＞農産物販売金額＞「表示レベルを指定する」で「市区町村単位で表示する」を選択＞グラフを表示＞「比較地域を追加する」で比較対象自治体を追加

Point!

経営体当たりでみると、農産物販売金額は他市町村と比較して高いとはいえない

課題の見える化

観光面では、平泉町に対する大きな観光需要を一関市が十分に取り込めていない現状を把握した。また、農業面では、一関市は岩手県内のみならず東北地方全体においても農業が盛んな地域であり、地域を支える基幹産業となっている一方で、経営体当たりの農産物販売金額は県内の他市町村を下回っていることが分かった。

以上を踏まえ、一関商工会議所では、平泉町に対する観光需要の取り込みとさらなる農業の底上げが必要であることを認識した。

「食と農の景勝地」申請の計画策定と今後の施策検討にあたっては、これらの課題の解決につながる施策の方向性を示すこととし、さらに分析を進めた。

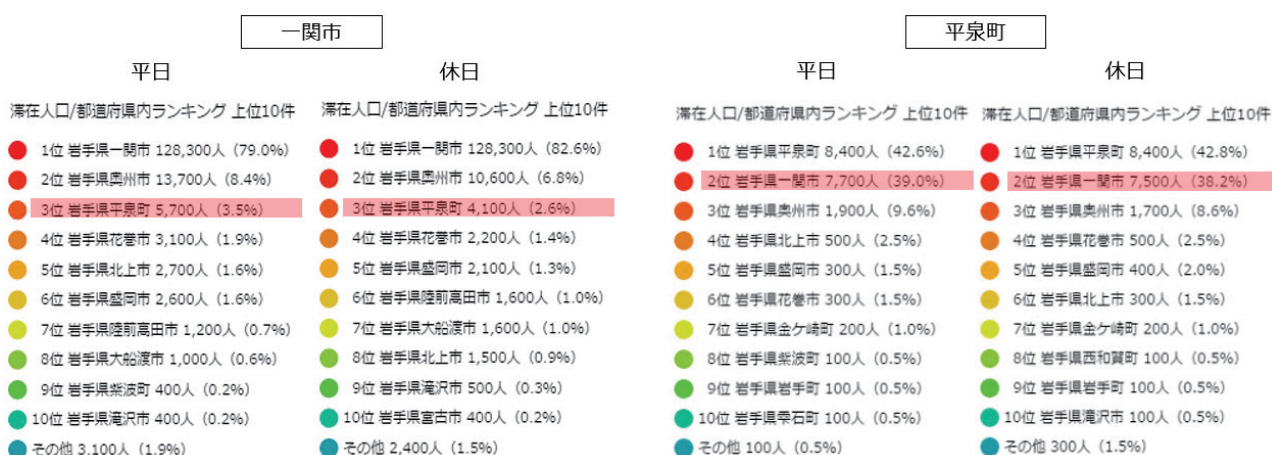
分析⑤ 一関市と平泉町の人の流れ（まちづくりマップ）

平泉町に対する観光需要を取り込む施策を検討するため、一関市と平泉町の間の人の流れについて分析した。

図8は、一関市および平泉町に滞在している人が県内のどの市町村から訪れているかを、平日・休日別に示したものである。これをみると、一関市・平泉町ともに、それぞれの自治体が上位となっており、人の流れにおいて密接に関連していることが分かる。特に、一関市から平泉町に訪れる人は、平日・休日ともに全体の4割弱を占めている。

以上より、平泉町への観光において、一関市が交通や宿泊の拠点となっていることが推察される。

（図8）まちづくりマップ From-to分析（滞在人口）[2014年]



●まちづくりマップ>From-to分析（滞在人口）>「表示地域単位を切り替える」で「市区町村→市区町村（指定地域）」を選択>「表示する内容を指定する」で平日または休日を選択>グラフを表示

（注）2017年2月におけるRESAS第2次リリース前のマップであり、現時点の内容とは一致しない。

Point!

一関市は、平泉町を訪れる観光客の拠点となっていることが推察される

分析⑥ 一関市の農業生産関連事業の実施状況（産業構造マップ）

次に、さらなる農業の底上げのための施策を検討するにあたり、農業生産関連事業の実施状況を分析した。

図9は、一関市における農業生産関連事業の実施状況について、偏差値によるレーダーチャートで県平均との比較を示したものである。これを見ると、一関市は大半の項目で県平均を上回る高い水準となっているが、「海外への輸出」が県平均を下回っており、また、「農家民宿」も県平均をわずかに上回る程度にとどまっていることが分かる。

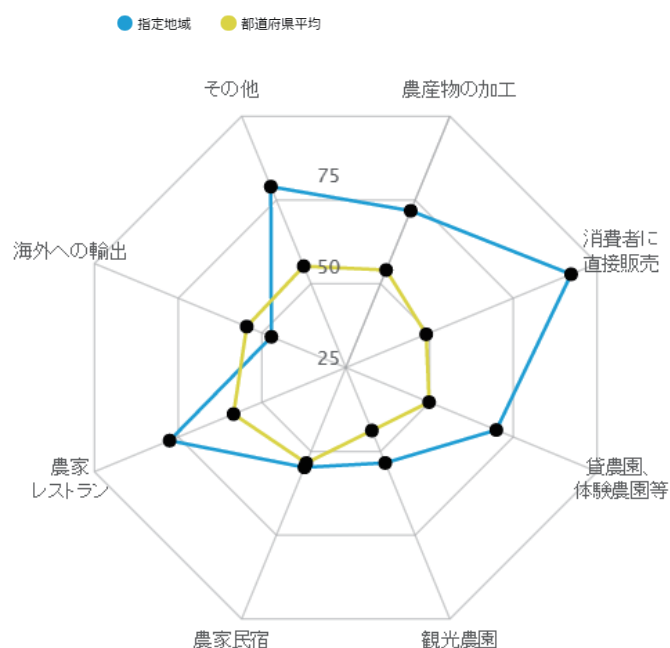
以上より、従来はあまり行われてこなかった海外輸出や農家民宿等に注力していくことが、農産物販売金額の増加につながる可能性があると考えた。

（図9）産業構造マップ 農業者分析 [2010年]

農業生産関連事業の実施状況（レーダーチャート）

指定地域：岩手県一関市

2010年



●産業構造マップ>農業者分析>「表示レベルを指定する」で「市区町村単位で表示する」を選択>農業生産関連事業の実施状況>レーダーチャートを表示

Point!

海外輸出や農家民宿等の取組によりさらなる農業の底上げにつながる可能性がある

分析⑦ もち食文化に関する住民・事業者の意識（独自分析）

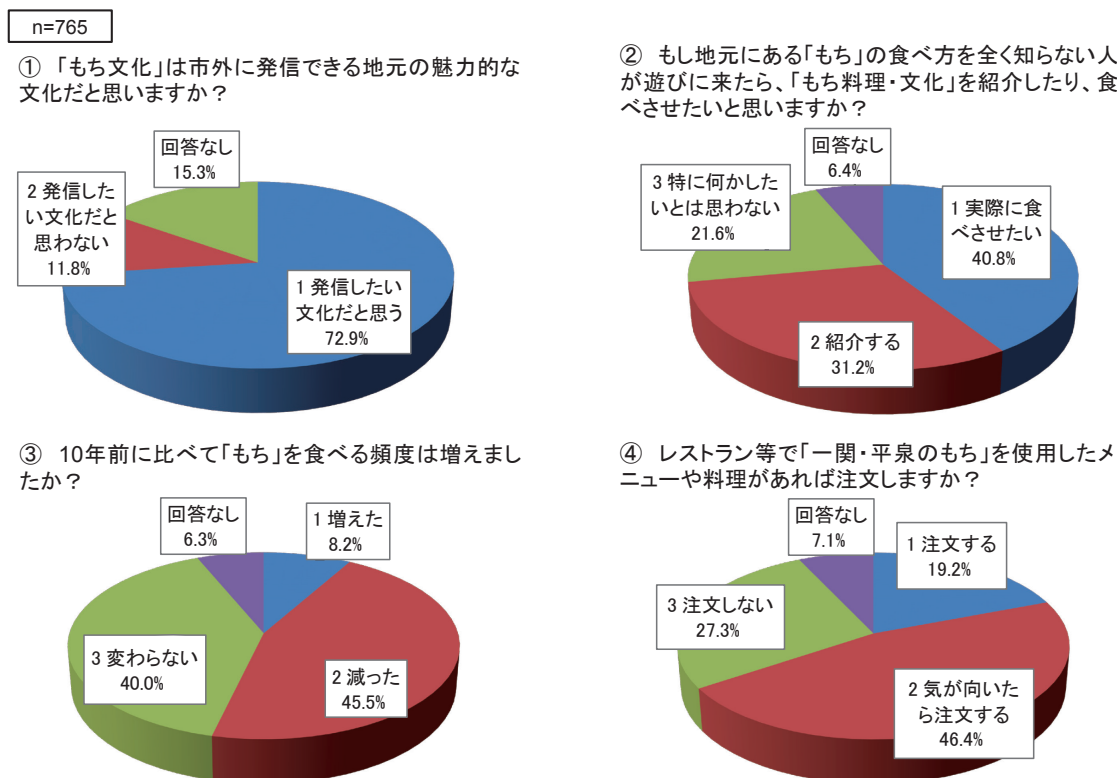
一関市の地域資源である「もち食文化」を活かした観光と農業の振興に向けて、一関市・平泉町の住民や飲食・サービス業事業者を対象に実施したアンケートの結果を分析した。

図10は、アンケート結果の一部を示したものである。まず①をみると、「もち文化」は一関・平泉地域の魅力的な文化だと考えている人が多いことが分かる。また、②をみると、地域外の人にも「もち料理・文化」を積極的にアピールしていきたいと考えている人が多いことも分かる。

一方、③をみると、もち食文化が浸透している一関・平泉地域においても、もちを食べる頻度が少なくなっていることが分かる。また、④をみると、レストラン等でもちを使ったメニューを「注文する」と回答した人は2割弱となっており、必ずしも外食でもちを食べる機会が多くないことが分かる。

以上より、地域の人々はもち食文化を一関・平泉地域の魅力的な地域資源と考えているが、観光客にアピールするためには、もち食を楽しめるレストランや、もち食文化を体験できる場所が必要であり、それらを増やしていくためには、もち食文化の継承や、地元の人たちのもち食に対する関心の向上にも取り組んでいく必要があることが分かった。

（図10）もち食文化に関するアンケート [2016年]



●一関商工会議所「もち食文化に関するアンケート」

Point!

「もち食文化」の発信とともに、地域内での文化継承等の取組も必要となる

得られた示唆と課題解決のための施策案

一関市は、観光面では平泉町の観光における拠点となっており、人の流れにおいて密接に関連していること、農業面では海外輸出や農家民宿等の取組によりさらなる農業の底上げにつながる可能性があることを把握した。また、地元の人たちも、もち食文化を一関・平泉地域の魅力的な地域資源だと考えているが、もちを食べる頻度は減り、外食でもちを食べる機会も少ないことが分かった。

一関商工会議所が行ったこれらの分析結果は、一関もち食推進会議における地域活性化の検討の場で共有され、立場の異なる構成員の共通認識を形成する上で重要な役割を果たした。そして、観光においては、今後設立予定の「日本版DMO^{*2}」を中心とした一関市と平泉町の地域連携が重要であること、農業においては、もち食文化の推進により稲作をはじめとした地域農業全体の活性化を図ることはもちろん、農産物の海外輸出や農家民宿等の新たな取組が必要であることを共有した。また、地元でのもち食文化の継承に向けた取組にも力を入れていくこととした。

以上の分析および検討を踏まえ、一関もち食推進会議では次の施策を取りまとめた。

- 平泉町の観光地と一関市の農家民宿やもち料理・もち食文化体験を組み合わせた周遊ルートの設定
- 農産物の海外輸出へ向けた市場調査
- 市内飲食店におけるもち食メニューの充実や小中学校における「もち本膳出前授業」

なお、これらの内容をベースに「食と農の景勝地」の認定申請をした結果、全国44地域の中から、認定5地域の一つに選出された。一関商工会議所は、これを追い風にして、もち食文化を活かした観光や農業の活性化を一層推進していきたいと考えている。

2:地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、多様な関係者と協働しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人。

「食と農の景勝地」取組計画書（抜粋）

(料理名 もち本膳) 藩政時代から伝わるもち食儀 礼で、もちの本膳料理を体験 (主な食材) もち米、たいこん、小豆、枝豆、 しいたけ等 (食材の地域内自給率) もち米100% (もち本膳の食べ方) 1. 膳 のどの通りを食する 2. あんこ餅 おかわりOK 3. 料理餅 (しょうが・ずんだ・くるみ) など おかわりOK 4. 引菓餅 おかわりOK 5. たくあん(漬物) たくあんでお餅を さくわいにする。 6. 膳の湯 お湯も入れて 食べていただく。	(料理名 もちバイキング) 様々なもち料理が食べ放題 (主な食材) もち米、大豆、小豆、枝豆、えごま、鶏肉、 しいたけ、くるみ、沼えび等 (食材の地域内自給率) もち米100%	(料理名 もちフォンデュ) もちとチーズの絶妙なマッチング (主な食材) もち米、チーズ、ソーセージ、季節の 野菜等 (食材の地域内自給率) もち米100%
--	---	---

(周遊ルート) □「食」「景観」「歴史・文化」「特産品」等を組み合わせたルートづくり A [平泉の世界遺産ともちつき体験] 中尊寺 毛越寺 道の駅 厳美溪 厳美溪 農家民宿 浄土思想に基づき、 寺院・庭園に表現 された理想世界は 他に例のないもの。 白杵を使った昔な がらのもちつき体 験。好みのおもち をバイキングで楽し める。 名勝及び天然記 念物に指定。奇岩、 怪岩、深淵、洞穴 に迫る、ダイナミ ックな景観。	B [荘園の稲刈体験、もち料理に舌鼓] 農業体験 骨寺村荘園 交流館 若神子亭 農家民宿 骨寺村荘園遺跡 内の水田で農業 体験(稲刈り、田 植え等)。 荘園絵図に記さ れた中世の村の 景観・姿を視覚的 に体験できる。 地域の食材(南部 一郎かぼちや、え ごま、ねぎ)にこ だわった「三色も ち」が楽しめる。	C [もち食儀体験、農村生活を満喫] 蔵元レストラン せきのいち 京津畑交流館 山がっこ 農家民宿 もちの本膳料理 に、武家社会 から伝わる食作 法(もち食儀礼) を体験。 魔校を活用した 交流施設で加工 体験、地元行事 等による交流。
--	---	--

(品質の維持・向上を確保するための体制) ■もち食メニューや接客サービスの充実 もち食提供店(30店舗)で組織する「一関・平泉もち街道の会」が中心となり、 メニュー開発や接客等の研修を行い、品質の維持・向上を図る。 ■農泊や農村体験等の取組拡大 「いちのせきニューツーリズム協議会」及び 「平泉町グリーン・ツーリズム推進協議会」が 中心となり、農泊の拡大、各種研修等による サービス向上、外国人旅行者のニーズに対 応した体験プログラム開発等に取り組む。 (「一関・平泉もち街道の会」参加飲食店)	(人材の育成・確保するための体制) ■「もちマイスター検定」の継続実施 「もちマイスター検定委員会」(仮称)において、もち食に関する講義・実習・検定を 引き続き実施し、文化的側面の理解や普及拡大、ガイド等の養成につなげる。 ■「もち本膳出前授業」等の取組推進 小中学校で、もちを取り入れた学校 給食、「もち本膳出前授業」を引き続 き行い、次世代への文化伝承の取組を 推進。また、「米づくり体験」を通じて、 食農教育を支援。 (もち本膳出前授業)
---	--

(実行組織の体制) 「一関もち食推進会議」は、地域の産学 官民の関係者で構成(平成22年設立)。 - 当会議内に設けた「食と農の景勝地」 推進委員会(7月20日設置)において、 事業全体をマネジメント。 - 各事業については、「全国ご当地もち サミット実行委員会」や「地域食材供給 連絡会議(仮称)などの運営体により推進。 - 外部有識者等による「専門家会議(仮称)」 を設置し、各事業の進捗等を確認・評価。	一関もち食推進会議 理事会 事務局 会長 専門家会議(仮) 「食と農の景勝地」 推進委員会 全国ご当地もちサミット実行委員会 一関・平泉もち街道の会 地域食材供給連絡会議(仮) いちのせきニューツーリズム協議会 平泉町グリーン・ツーリズム推進協議会 もちマイスター検定委員会(仮) 農業・商工・ 観光団体 観光関連 事業者 民間 団体 大学・ 高専 行政 日本版 DMO 関係省庁・ 団体 クリエイ ター等	(外部クリエイターとの連携等による 地域ブランディングの推進) 「もち食文化」による地域ブランディ ング、お土産や飲食メニューの開発、 交流・体験の拠点づくり、プロモーション やガイドのツール作成等のため、 各種支援制度の活用や外部クリエイ ターとの連携等を積極的に推進。 - 当地域を対象エリアとして検討中 の日本版DMO(平成30年1月設立 予定)と一体的に取り組む。
---	--	---

利活用の現場から ― 関商工会議所 ―

RESASの分析結果を用いて「一関もち食推進会議」の議論をリードした一関商工会議所。もち食文化を活かした地域活性化への思いや今後の展望についてお話を伺った。

古くから地域に根付く「もち食文化」

一関・平泉地域における「もち食文化」の起源は400年前と言われます。日常生活で気軽に食べるものから冠婚葬祭や七五三等の節目に食べるものまで、もち食のレシピは300種類にのびります。当地域の観光、農業等に携わる関係者は、この「もち食文化」を貴重な地域資源と位置付け、観光や農業の振興、そして地域の活性化につなげられたいの思いを以前から持っていました。そこで2010年に、関係事業者等が集まって「一関もち食推進会議」を立ち上げ、以来、様々な取組を続けてきました。

2013年にユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」に「一関・平泉地域のもち食文化」が例示されるなど、もち食への関心が徐々に高まりをみせる中、さらに力を入れていこうと考えていたところ、新たに創設された「食と農の景勝地」の制度を県の担当者から紹介され、認定に向けて挑戦することにしたのです。



■ RESAS を操作して分析結果を確認する職員

RESASが新たな視点をもたらす

「食と農の景勝地」の認定申請にあたり、一関・平泉地域の観光や農業に関する現状分析を行わなければなりませんでしたが、これまで市や農協の統計をみたことはあっても、そこから何かを分析するというような経験はなかったので、どうしたらよいのかと思っていました。そんなとき、RESASのことを知ったのです。試しにいろいろ触ってみると、これが面白いんですね。地域間の比較や人の流れの把握等、これまで考えたこともなかったような新しい視点を提供してくれ

ました。その上手軽だし、図もきれいで、大変重宝しています。最初は操作方法に少し戸惑いでしたが、公開されているマニュアルをみればすぐ慣れましたね。今では会議中に気になったこと等があれば、その場ですぐ調べるようにしていますよ。

データを活用して地域を活性化

今回、「食と農の景勝地」の認定をいただいたことを契機として、もち食の魅力発信や、地元農産物の海外輸出促進へ向けた調査等、「もち食」を軸にした一関・平泉地域の観光・農業の活性化を一層推進していきたいと考えています。

また、2018年に設立予定の「日本版DMO」や、工業等の観光・農業以外の分野における検討においても、積極的にRESASを活用し、地域活性化に向けた取組を進めていきたいですね。実は先日、工業関係の会議があったのですが、そこで「RESASというツールがあるよ」ということを、出席者に紹介してきたところなんです。データの活用が一関・平泉地域に定着し、地域活性化に関する関係者間の議論がより一層活発になることを期待しています。



■ 「食と農の景勝地」認定証授与式の様子